

授業づくり通信

2025年7月発行

第6号



教師用指導書の附属DVDから高画質画像がご覧になれます

P62_1 鎌倉時代末期にえがかれた戦闘のようす『春日権現験記絵』

左右にいるたて楯を持つ人たちは
どんな人たちだろう

◆◆◆◆◆目次◆◆◆◆◆

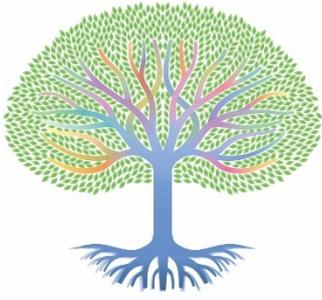
特集—中世・近世の戦争と民衆

- 執筆者が語る授業づくりの視点…東国に幕府をつくる 四十栄貞憲 2-4
 - 授業に役立つ資料…戦場から逃亡・投降した兵士・民衆 山田 麗子 5-7
 - 読書室…藤木久志の歴史学に学ぶ —戦国の村と民衆— 編集部 8
-
- 執筆者が語る授業づくりの視点…白砂糖国産化の挑戦 小石都志子 9-11





学び舎中学歴史教科書



授業づくり通信

2025年7月発行

第6号



教師用指導書の附属DVDから高画質画像がご覧になれます

P62_1 鎌倉時代末期にえがかれた戦闘のようす『春日権現験記絵』

左右にいるたて楯を持つ人たちは
どんな人たちだろう

◆◆◆◆◆ 目 次 ◆◆◆◆◆

特集—中世・近世の戦争と民衆

- 執筆者が語る授業づくりの視点…東国に幕府をつくる 四十栄貞憲 2-4
 - 授業に役立つ資料…戦場から逃亡・投降した兵士・民衆 山田 麗子 5-7
 - 読書室…藤木久志の歴史学に学ぶ —戦国の村と民衆— 編集部 8
-
- 執筆者が語る授業づくりの視点…白砂糖国産化の挑戦 小石都志子 9-11



東国に幕府をつくる

第3章(4) 鎌倉幕府 (p62-63)

四十栄 貞憲



鎌倉時代末期に描かれた戦場の様子(春日権現験記絵巻内三の巻の場面)

(4) 東国に幕府をつくる — 鎌倉幕府 —

各地で平氏政権に反対する内乱がはじまった。関東の武士たちは何を願っていたのだろうか。



源頼朝(1147-1199) (伊勢国津市)



鎌倉幕府の成立を促した源氏と平氏の勢力範囲(鎌倉幕府の成立を促した源氏と平氏の勢力範囲)

062

■ 内乱のなかの民衆
12世紀後半、平氏に反対する動きが各地に広がり、5年におよぶ大規模な内乱になりました。戦場には、鎧を身につけない民衆もかりだされました。民衆の役割は、味方の堀や櫓を築いたり、ときには、敵の堀や櫓を、用意した農具などでこわしたりすることでした。また、民衆は糧を持ち、敵からの攻撃を防ぎました。こうして、村々は農作業の働き手を失い、戦いにまき込まれました。ききんなどの災害も多かったため、糧もみがなくて米をつくれなほど、荒れはてた地帯もありました。

■ 頼朝の反乱と東国
下総国(千葉県)の相馬御厨という土地は、12世紀前半に千葉氏が開発し、伊勢神宮(三重県)に寄進した荘園です。しかし、相馬御厨の権利をめぐって争いがたえず、平氏が政権をとると、平氏と結びついた常陸国(茨城県)の佐竹氏にうばわれてしまいました。1180年、源頼朝が伊豆(静岡県)で、平氏に対して反乱をおこしました。伊豆の北条氏などが頼朝に味方しましたが、石輪山の戦い(神奈川県)で平氏軍に大敗北し、房総半島(千葉県)に逃れました。ここで、千葉常胤や上総介広常らが大きな武士団をひきいて、頼朝のもとにかけつけます。頼朝は、平氏軍と戦うことを命令しますが、千葉常胤や上総介広常は、まず、敵対していた佐竹氏を討つべきだと主張しました。頼朝と東国武士たちは佐竹氏を攻め、屈服させました。東国武士たちを味方にして、頼朝の軍勢は勢いをまし、鎌倉(神奈川県)



各地の任命文書。右下に源頼朝の花押(サイン)がある。幕府をおこした平氏軍を討ち、その地帯の領地だった源氏領(伊勢国)の地頭に、1185年6月15日、御家人の権臣源久を任命する文書。(鎌倉幕府成立の歴史)



源平の内乱

県)に本拠をおいて東国を支配しました。ついに1185年、頼朝の命令を受けた弟の源義経と東国武士たちの軍勢は、平氏を壇ノ浦(山口県)に追いつめて滅ぼしました。そのあと、義経は頼朝と対立して、陸奥国平泉(岩手県)に逃げ込みます。頼朝は大軍をひきいて攻め、1189年、奥州藤原氏を滅ぼしました。

■ 将軍・執権と御家人
1185年、頼朝は義経を討つことを理由として、国ごとに守護を、領地ごとに地頭をおくことに成功しました。頼朝は戦いで没収した敵の領地を、手柄をたてた武士(御家人)に恩賞としてあたえ、地頭に任命していききました(御恩)。恩賞をえた御家人は、頼朝にしたがって戦いに加わることで、忠誠をよめました(奉公)。こうして、強い軍力をもとにした鎌倉幕府がつけられました。頼朝は、朝廷に対する力を強め、1192年、朝廷から征夷大将軍に任命されました。しかし、御家人たちの対立がたえず、頼朝のあとをついだ男たちは、二人とも殺されます。幕府の実権は、頼朝の妻・政子の実家の北条氏にのぎりました。北条氏がついた地位を執権といいます。

■ 北条政子と承久の乱
京都では、後鳥羽上皇が、3代将軍の実朝が殺されたのを見て、1221(承久3年)、幕府の執権・北条義時を討てと命じました。北条政子は、いままご頼朝の御恩に報いるべきだと御家人たちに訴えました。東国武士たちはこれにこたえ、京都を攻めて勝利しました(承久の乱)。政子は実際には、将軍の役割を果たしていたといわれます。幕府は後鳥羽上皇を、隠岐島(島根県)に流し、京都に六波羅探題をおいて西日本も支配するようになりました。そして、執権となった北条義時は、1232年、御成敗式目(法律)を定め、御家人の領地争いを裁く基準などを明らかにしました。こうして鎌倉幕府はようやく安定しました。

守護と地頭
守護は国ごとに任命され、その国の御家人を統率し、戦争に動員する権限をもっていました。地頭は荘園や公領ごとに任命され、地頭の管轄と年貢や税の徴収を請け負った。



北条時宗(1177-1225) (伊勢国津市)

北条政子の訴え
みなもの、よく聞きなさい。これが最後の言葉です。鎌倉殿(頼朝)が頼朝を討てた。幕府をひいてのことか。守衛といひ、領地といひ。その御恩は山よりも高く、海よりも深い。みなにこれに報いていいたい。御恩は、決して滅ばないはず。名譽を重んじる者は、京都に向かって出陣し、幕府を守りたい。(『吾妻鏡』一部要約)

063

1 内乱に巻き込まれた民衆は

どう生き抜いたのか

鎌倉幕府の成立を扱う単元にふさわしい導入の資料は何だろうか。源頼朝像か、それとも内乱を示す地図か。まずは、約10年にも及ぶ内乱のなかを、人々はどうのように生き、何を願ったのかを考えるとところから始められないか。

そこで、学び舎中学歴史教科書では、フォーカス「内乱のなかの民衆」と、メイン図版『春日権現験記絵』を載せた。鎌倉時代末期に描かれたこの絵巻には、民衆も参加した戦闘の様子が描かれている。では、民衆はどのように戦闘に関わったのだろうか。

内乱期、各地の戦場で城郭が構築され、そのために人夫が徴発された。さらに、遠征では工兵隊として敵の城郭の除去という役割が与えられた。それだけではなく、楯持ちとして戦闘に協力することもあったと想定される。ここに描かれた楯持ちの姿は彼らが非戦闘員であったことを示しており、動員された百姓の役割であったことがうかがえる(1)。

つまり、全国各地に広がった治承・寿永の内乱では、武士だけでなく民衆の働きが戦場の勝敗を左右したのだ。また、戦乱の舞台になった地域はもとより、武士団の進軍途中にあった村々では、現地調達方式で食糧

4章(6) 僧が見た朝鮮の民衆 (教科書 p98-99)

戦場から逃亡・投降した兵士・民衆

山田 麗子

民衆にとっての戦争を考える

ウクライナ侵攻、ガザへの攻撃が収まりをみせません。国連を中心とした国際秩序が崩れ、世界は厳しい局面にあります。こうした中、今日の戦争はもちろん、過去の戦争学習についても見直すことが必要ではないでしょうか。

特に戦国時代は、戦争の惨禍でなく、「いくさ上手」の戦国大名の活躍に焦点が当てられる傾向があります。教科書4章(6)「僧が見た朝鮮の民衆—秀吉の朝鮮侵略」では、人びとの姿をとおして、朝鮮侵略戦争を多角的に描いています。さらに、本稿では、この戦争で朝鮮側に投降・逃亡した日本の兵士・民衆について記述しました。

降倭とよばれた人たちの姿から、民衆にとっての戦争が見えてきます。

1 戦争に動員された人たち

1592年4月、秀吉に命じられた諸大名は、16万人の大軍で朝鮮に攻め込みました。戦争に動員されたのは武士ではありません。軍の半数以上は百姓でした。薩摩国(鹿児島県西部)の大名・島津義弘の軍を例にとると、1万2695人のうち、武士といえる者は1727人(約13%)、武士の従者が5068人(40%)で、その他の5900人(47%)は強制的に動員された民衆でした。

日本軍は、5月に都の漢城を攻め落とし、6月に平壤を占領しますが、明の大軍と義兵に押し戻され釜山に退却します。1598年まで続いた戦争で、日本軍・朝鮮軍・明軍の犠牲は膨大なものでした。(p7の表参照)

ルイス・フロイスは日本軍の死者について「敵に殺された者はわずかで、大部分の者は、労苦、飢餓、寒気、疾病で死亡したのである」と記しています。

2 逃亡・投降した日本人

この戦争で、朝鮮側に投降したり逃亡したりした日本人は、降倭とよばれました。その数は1万人にのぼるといわれています。積極的に投降したのもあれば、何かの事情から投降したものもいました。降倭についての記録は、1594年から増えていきます。その背景に倭城の建設がありました。秀吉は、明と和議の交渉をしながら、同時に朝鮮への攻撃を行い、南の海岸一帯に倭城とよばれる砦の城を築くよう命令しました。この建設工事の厳しさに耐えかねて、逃亡者が続出したのです。

朝鮮水軍を指揮した将軍・李舜臣が、備忘録として書き続けた「乱中日記」には、降倭についても多くのことが記されています。

1596年、島津の軍営から5人で投降してきたものが、逃亡の理由を次のように述べたとあります。

「大将の性格が悪く、課せられた役が重く厳しい」大将とは、島津義弘の息子の忠恒です。名護屋城で出陣を待つ間に蹴鞠の庭と茶室をつくらせて自分は趣味に浸る一方、戦場に向かう恐怖から逃亡した水夫たちを処刑しています。同じことを朝鮮の軍営でもくり返しました。忠恒は、城の木材を調達させるために、兵たちには際限のない労働を強いる一方で、四隅に柳・桜・松・楓の木を植えた蹴鞠の庭と茶室、さらに書院までつくり連歌を楽しんでいます。ここでも、労役の厳しさから逃亡した兵士を捉えて処刑しました。



日本軍の進攻路と明軍・義兵の動き (教科書 p99)

特集
中世・近世の
戦争と民衆

読書室

藤木久志の歴史学に学ぶ

—戦国の村と民衆—

■『新版・雑兵たちの戦場—中世の傭兵と奴隷狩り』

「好きな歴史上の人物」を聞く調査では、今も織田信長など戦国武将が人気を集めている。大河ドラマへの登場も多く、国取りのゲームもある。華々しい武将を中心にした戦国時代のイメージは根強い。

しかし、実際は、戦国大名の軍団の7割から8割は身分の低い武士や荷物を運ぶために村からかり出された雑兵が占めていた(学び舎教科書 p83)。

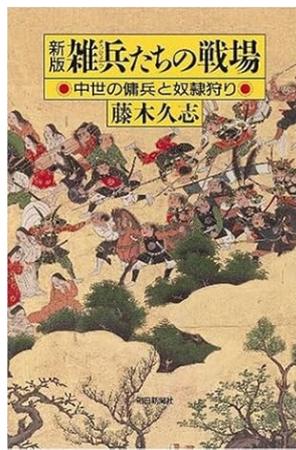
『雑兵たちの戦場』(1995年・2005年新版)を読んだときの衝撃は忘れられない。そこには全く異なる戦国時代像が展開されていた。民衆にとっての戦争、それは「食うための戦争」だった。

中世飢饉データベースからは、戦国時代が想像を超える厳しい飢饉の時代であったことが見えてくる。越後の上杉謙信の出兵一覧表では、食糧不足に直面する端境期の晩秋に、遠い関東に出兵していた。戦争は貧しい村の口減らしであり、戦場は食いつなぐ場だった。乱取りを行う「稼ぎ場」でもあった。

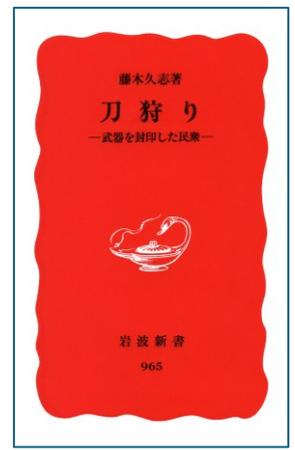
乱取りとは、戦場で人や物を略奪することをいう。上杉だけではない。武田軍の雑兵たちも村々に火を放ち、女性と子どもを集中して乱取りした。九州、紀州、奥羽など、各地で行われていた乱取りの実態が明らかにされる。被害者である女性や子どもはどうなったのか。なかには、転売されたり、海外に売られたりした人々もいた。博多や平戸が世界有数の奴隷市場であったことに驚きを禁じ得ない。

日本が統一されると、略奪の場は朝鮮半島に移った。朝鮮侵略時の激しい略奪・人取りは、戦国の日本国内で行われていたことの輸出であった。

本書から、言いようのない戦争の惨禍が迫ってくる。戦国時代でこそ民衆にとっての戦争を学ぶべきではないか。その学びが、次の時代像にもつながっていく。



朝日新聞社 2005年



岩波新書 2005年

■『刀狩り—武器を封印した民衆』

中世の村は武装し、近隣の村との争いでは百姓たちは武器を持って戦った。戦場でも武器を携帯した。

ところが、秀吉は1588年に刀狩令を出して、武器を差し出せと言う。百姓たちは抵抗しなかったのか。

本書はまず、刀狩令書三カ条を読み解く。これは、こう言えば百姓は武器を出さだろうと、説得の秘策を大名に授けるものだった。大名間の私闘を禁じた惣無事令と刀狩令は戦争制御の策として進んでいった。

しかし、刀狩令は村のすべての武器を廃絶する法ではなかった。各地の実施状況から、没収の重点は刀と脇指だったことがわかる。強力な武器となる鉄砲の所持が、害獣を駆除する目的で許された。村には大量の鉄砲が残った。江戸時代の松本藩の例では、1687年に村々が所持する鉄砲は1000挺を超え、藩の所持する200挺の5倍だった。

村は、農具としての鉄砲を、武器にすることを自ら封印したのだ。およそ2世紀の間、領主も百姓も人に対して鉄砲を向けなかった。そこには、決して戦国時代に逆戻りしないという社会の自制があった。

戦争から平和へと転換する時代の皮膚感覚として、俳人・松永貞徳(1571~1654)の自叙伝が紹介されている。彼は、少年期であった信長の時代は相次ぐ内戦のなかで常に身構えていたこと、青年期となった秀吉の時代の戦争の内実が、激しい略奪だったことを語る。そして、徳川の世に大人となって、不断の緊張と略奪から解放された深い喜びの想いをもらしている。

藤木氏は、マッカーサーによる武装解除を3つ目の刀狩りとして論じている。二度と戦争はしないと憲法9条に思いを寄せた人びとと、松永貞徳の戦国の世が終わった深い安堵感が重なり、時代を超えた民衆の平和への願いを感じる。(編集子)

白砂糖国産化の挑戦

小石 都志子

第5章（6）将軍吉宗のなげき—享保の改革と田沼の政治（p118-119）



11 長崎での交易（『蘭館図絵巻』）（蘭館図絵巻より複製）

12 コンペイトウ（オランダ人が長崎に持ち込んだ砂糖菓子の原料）を復元したものを、

（6）将軍吉宗のなげき—享保の改革と田沼の政治—

砂糖が国産化されていく。将軍吉宗、田沼意次はどんな考えでどんな取りこみをしたのか。

■長崎に荷揚げされた砂糖

16世紀半ば、コンペイトウなどの南蛮菓子が伝えられました。砂糖の味が知られるようになると、砂糖は長崎にたくさん輸入されるようになりました。しかし、砂糖は高値で取り引きされたので、大量の金銀が海外に流出しました。

そこで、8代将軍・徳川吉宗は、輸入に頼っていた砂糖や朝鮮人参などを、国内で生産しようと考えました。漢文に翻訳されたヨーロッパの書物の輸入制限をゆるめ、海外からも情報を集めました。サトウキビの苗などを取りよせて、江戸城などで試作をしました。

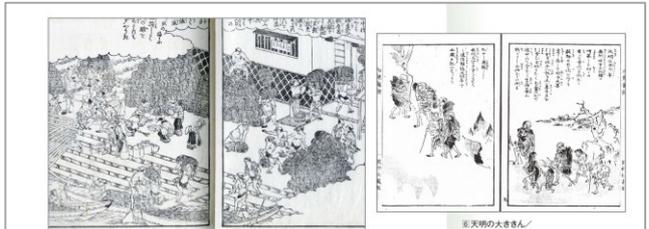
■財政の立て直しの改革

幕府は、幕府側からの年貢収入と、金や銀の鉱山からの収入によって、大きな経済力をもっていました。ところが、17世紀後半、5代将軍・徳川綱吉のころには、金銀の産出量が減少する一方、出費が増大して幕府の財政は苦しくなりました。幕府は、金や銀の量を減らした賈の悪い貨幣を大量に発行し、そのために物価が上昇して、政治への批判が高まりました。

1716年、将軍となった吉宗は、新しい政策を進めました（享保の改革）。有能な人材を登用して、財政の立て直しをはかりました。吉宗は、武士に質素・儉約を求め、大名たちに一時的に米を差し出すように命じました（上米の制）。

一方、幕府の収入をふやすために、新田開発を奨励し、年貢率を上げ

118



13 大坂の屋敷敷（『蘭館図絵巻』）（蘭館図絵巻より複製）

14 天明の大ききん（天明の大ききん）
良料を求めてさまよう人だ。（『天明の大ききん』）（天明の大ききんより複製）

ました。享保の改革直前の幕府領の米の石高は、約400万石でしたが、1730年代に約450万石まで増加し、年貢の量はふえました。しかし、さまざまな商品の値段が下がって、米価はとくに下がりが、財政収入の増加には結びつきませんでした。

そのほかに吉宗は、裁判での刑罰の基準を定めた公事方御定書制定し、庶民の意見を取り入れるために目安箱を設けました。

■田沼意次の政治

18世紀後半、政治の実権をにぎった老中・田沼意次は、幕府の収入をふやすために、さまざまなことに取り組みました。砂糖の国産化もその一つです。武蔵国大田原村（神奈川県）の名主・池上幸豊は、幕府からサトウキビの苗を受けとり、栽培に適した土地を探し、栽培方法を研究しました。また、黒砂糖、白砂糖の製糖技術を向上させました。やがて、砂糖は安定して生産できるようになり、幸豊は各地に向向いてその技術を伝えました。

意次は、年貢だけでは赤字はならないと考え、発展する商工業に目を向けました。商工業者の組合に独自の営業を認める株仲間をつくることをすすめ、営業税などを納めさせました。また、田沼意次（千栗屋）の大規模な下宿をはじめ、ロシアとの交易や蝦夷地の大規模な開発を構想したりしました。

しかし、意次の政策はいきづまり、天明のききんや浅間山の噴火にもみまわれ、百姓一揆・打ちこわしなどがたびたび起こるようになりました。1786年、意次は老中の職を退きました。

一藩の財政の立て直し

年貢米を削減する財政は、藩も幕府と同じだった。多くの藩は幕府や江戸の生活で支出が激増し、財政の赤字がつづいてきた。水戸藩（山形藩）は、18世紀後半には幕府の8年分にあたる20万石の産金を持っていた。藩主・上杉治憲（重定）は、漆器、絹織物、乾物などの特産物の生産をふやし、その実質を藩が独占して利益を上げた（専売）。また、武士に課税した機軸を求めるとの藩政改革をおこない、藩が幕府から自立していく動きがはじまった。

119

はじめに

これまで、8代将軍吉宗と老中田沼意次の政策を、相反するものとして捉えることがなかっただろうか。教科書では18世紀の幕府財政再建を中心に、5代将軍綱吉、8代将軍吉宗、老中田沼意次が断絶した政治を行ったのではなく、それぞれ前の政治を受け継いで、時代の変化に応じて特色ある政治を行ったという流れで構成した。例として白砂糖の国産化政策をとりあげた。

1 砂糖から入る授業

誰もが好きな甘いお菓子に欠かせない砂糖、これに注目して授業に取り入れたい。図版②は、1569年、イエズス会の宣教師ルイス＝フロイスが、織田信長に初めて謁見したときに献上したコンペイトウを復元したものである。「どんな味だろう」と生徒の関心が広がるだろう。復元品は市販されているので、当時の味を味わうことができる。

1543年、ポルトガル人の種子島上陸以来、ポルトガル船の入港が始まった。続いて1549年、ザビエルがキリスト教布教のため来日。それ以来、ヨーロッパの文化が日本に伝えられ、その中で砂糖を使ったコンペイトウやカステラなどの南蛮菓子がもたらされた。1600年頃から唐船が長崎に来るようになり、ポルトガル船の主な貿易品が生糸、織物、砂糖であることを知ると、唐船の人たちも生糸・絹織物・砂糖・薬種などを積んで日本にやってきました。1640年、徳川幕府は平戸にいたオランダ人を長崎出島に移し、出島のみで貿易を行わせた。蘭船も唐船の実情をみて、船の底荷として台湾産の砂糖を用いるようになった。こうしてポルトガル船の入港を禁止したいわゆる鎖国の後も、蘭船や唐船によって東南アジアや中国、台湾から生糸・絹織物・砂糖・薬種などが長崎に運ばれたのである。

図版①は、『蘭館図絵巻』に描かれた長崎出島の水門の様子を描いたものである。蘭船の到着に合わせて



お知らせ

■新版教科書の指導書

社会科準備室や大学の教職研究室などにお備えください。

■指導書本体 (A4版 272ページ)

子どもの気づきから始まり、さまざまな学習活動を通して、学びあい深めあう授業例を載せています。

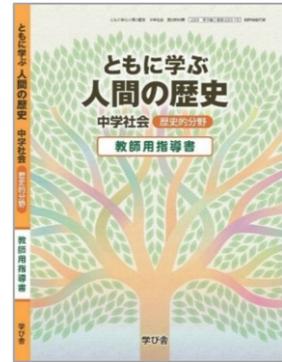
図版の詳しい解説や授業に役立つ資料を満載しています。

■附属DVD

教科書と指導書の全ページ、地図、グラフ、絵画などのデジタルデータを入れました。

拡大して観察できる高画質画像は主体的な学習に役立ちます。

詳しいことは同封のチラシをご覧ください。



●教科書セミナー

教科書セミナーは8月23日(土)に実施します。授業実践報告をもとに話し合います。詳しいことは同封のチラシをご覧ください。

★ブックレット第21号

ブックレットは年3回発行しています。A5判、700円+税です。バックナンバーも販売しています。各巻の内容は、学び舎のホームページで紹介しています。定期購読も受け付けています。ご注文は学び舎へ。E-mail:manabisha-ek@cap.ocn.ne.jp 電話:042-512-5960

「とも学ぶ人間の歴史」授業ブックレット No.21 7月発行

● 18世紀の薬草政策と朝鮮種人参の誕生

第5章(6)将軍吉宗のなげき

小石都志子

● 日露戦争に従軍した兵士と妻の手紙を読む

第8章(3)戦場は中国だった

鳥塚 義和

● ヒロポンと特攻 中学生に伝えたいアジア太平洋戦争の真実

第9章(11)餓死、玉砕、特攻隊

相可 文代

● キムチはなぜ辛い?—朝鮮学校の子どもたちと学ぶ「キムチの歴史」—

歴史を体験する

三橋 広夫



発行 ● 株式会社 学び舎

住所 ● 〒190-0022
東京都立川市錦町3-1-3-605

TEL ● 042-512-5960 FAX ● 042-512-5961

E-mail ● manabisha123@cronos.ocn.ne.jp

ホームページ ● <http://manabisha.com>

(株)学び舎HP TOP

授業づくりリンク集



水門が開かれ、大型船から降ろされた舶来品が、小舟に乗せられて運ばれてくる。この絵をよくみる。「二人でかついで、出島に運び入れようとしている籠のようなものは何かな。中身は何だろう」「重そうだね」「広場ではその重さを天秤で計っているね」「西洋人がいる。どこの国の人だろう」「四角い箱を担ぎ出している人も何人かいる。中身は何だろう」「広場の向こうの建物の中では何をしているのだろうか」「織物のようなものが見える」など、さまざまな声が生徒から上がるだろう。注目して欲しいのは二人が担いでいる籠。中身は「砂糖」であり、広場では大型の天秤を使ってその重さを計っている。男達が担ぎ出している四角い木箱には輸出品の「棹銅」が入っている。

銅が輸出されるようになる前は、大量の金銀が長崎から海外に流出していた。江戸時代前期には、江戸幕府は直轄領からの年貢収入のほか、佐渡相川、伊豆、但馬生野、石見大森などの金銀の鉱山からの収益と、活発な外国貿易による収入によって、他の大名を圧倒する豊かな財政を誇っていた。

しかし、明暦の大火で江戸再建に巨額を要し、5代将軍綱吉の贅沢や大寺社の造営、貨幣経済の発展に伴う物価上昇などにより、支出が増大した。その一方で、金銀の鉱脈が枯渇し、貿易も縮小し、元禄時代に入り、財政は初めて赤字になった。このころから輸入品の国産化を説く学者が現れた。6代、7代将軍に仕えた新井白石は、輸出品を金銀から銅と俵物(なまこ、あわび、フカヒレなどの海産物)に転換し、同様に輸入品の国産化を説いていた。

2 「将軍吉宗のなげき」とは

図版⑤「大阪の蔵屋敷」からは、どんなことが読みとれるか、聞いてみる。「蔵の前に米俵が山積になっている」「米はどこから運ばれてきたのかな」「陸揚げされた米は蔵の中に運び込まれている」「武士と商人が話し合っているのはなぜだろう」などの生徒の発言が予想される。江戸時代は、百姓は年貢としての米を藩や幕府に納めた。その米が大阪の蔵屋敷に運び込まれ、堂島の米市場で価格が決められ、換金されて武士の生活を支えるしくみになっていた。

8代将軍吉宗が行った享保の改革(1716～45年)では、綱吉の時代に明らかになった幕府財政の赤字が主

要な問題であり、財政再建が改革の中心となった。先にもみたように、幕府財政赤字のひとつの原因は鉱山収入が減少したことだ。図版④のグラフによれば1730年の幕府の財政収入は、全体の63.7%を年貢が占めており、年貢が基盤となっていることがわかる。吉宗は年貢をどのようにして増やそうとしたか、生徒に考えさせたい。「田を増やす(新田開発をする)」「米をたくさん集める」「年貢率を上げる」という答えは出てくるだろう。

表1は享保の改革前後の幕府領の石高、平均年貢収入、平均年貢率を10年ごとに示している。享保の改革後の1746～55年に年貢収入、年貢率がともにピークに達し、その後の10年もほぼ同様の数字で推移した。田沼意次が権勢を誇った1767年～1786年ころは年貢収入、年貢率がともに漸減した。

享保の改革により年貢収入は増加した。しかし、吉宗はなやんだ。年貢収入が財政収入に直結しなかったのである。それはなぜなのか、教科書§1「財政の立て直しの改革」から考えさせたい。

表1 幕府領の石高と平均年貢収入、平均年貢率

年代	幕府領の石高	平均年貢収入	平均年貢率 %
1663～72年	280万石台	102万7981石	35.83%
1686～95年	380～390万石台	130万2967石	33.57%
1706～15年	400万石	131万9574石	32.29%
1716～25年	412万石	139万5782石	33.88%
1726～35年	447万石	147万7350石	33.02%
1736～45年	459万石	158万0404石	34.38%
1746～55年	442万石	166万6845石	37.64%
1766～75年	438万石	151万8487石	34.66%
1776～85年	436万石	146万3986石	33.56%

(藤田覚『近世の三大改革』山川出版社、2002年、pp.21-23、
「江戸実情誠齋雜記『江戸叢書』巻の八、名著刊行会、1964年、
pp.192-207より作成)

3 白砂糖の国産化

吉宗は、国の富の流出を防ぐために、輸入品の国産化に着手した。輸入額が大きかったのは朝鮮人参を代表とする薬種や生糸だが、ここでは砂糖の国産化について具体的に見ていくことにする。

わが国で最初に作られた砂糖は黒砂糖である。江戸時代のはじめ頃、中国から製法が伝わり、元禄年間には、琉球や奄美群島で作られ大阪で売られるようになっていた。しかし白砂糖の製造には黒砂糖以上の高度な技術を必要とし、琉球や奄美で白砂糖を生産することはなかった。

吉宗は、キリスト教と関係の無い漢訳洋書の輸入を許可して、国内外のさまざまな文献から情報を得たり、長崎奉行に調べさせて、中国から甘蔗(サトウキビ)栽培法や砂糖製造法に関する情報を集めたりした。また甘蔗の苗を琉球から取り寄せて、浜御殿の御庭や江戸城の吹上御庭で栽培を試みたりもした。だが、吉宗存命中は幕府による砂糖の製造は実験の域を出なかったのである。

吉宗の白砂糖の国産化政策は、田沼意次にそのまま引き継がれた。意次は、町医者で人参の国産化に貢献し、当時すでに有名になっていた本草学者の田村藍水を幕臣に取り立てた。藍水は平賀源内の師でもある。藍水が17年かけて白砂糖の製造に成功すると(1762<宝暦12>年)、幕府はその製造と販売を藍水に求めた。しかし藍水は医師の仕事に専念できないとして、幕府の許可を得て、武蔵国大師河原村名主池上幸豊に託したのだ。

池上家は海辺の新田開発事業に従事してきた家柄で、幸豊もまた池上新田(現川崎市川崎区)を完成させている。他方、幸豊は殖産興業家として梨・葡萄などの果樹栽培、製塩芒硝(ぼうしょう)製造、絹の機織り、製紙などを行い、甘蔗栽培も試していた。白砂糖製造を託された幸豊は、藍水の砂糖製造技術が完全ではないことへの不安があったらしく、はじめはあまり積極的になれなかったのだが、1765(明和2)年、町医者の河野三秀と出会い、白砂糖の製造法を伝授されると、一転して積極的に甘蔗栽培法や砂糖製造法を研究しはじめた。実用化に成功すると、今度は甘蔗栽培と製糖法の普及に乗り出した。1774(安永3)年、関東地方で最初の伝法を行い、1786(天明6)年には、東海道・中山道・甲州道中、さらに畿内の村々で2度目の伝法を行った。このような幸豊の活動は、寛政(1789~1801年)のころから西日本を中心に黒砂糖・白砂糖の製造が広がっていく機運を作りだす役割を果たしたと考えられている。幸豊は1797年、氷砂糖の製造にも成功し、

翌年81歳の生涯を閉じた。幸豊の人生からは民衆(名主層)の生活向上に向けた執念や経済に果たした大きな力を感じずにはいられない。

4 老中田沼意次の政治

教科書 §2「田沼意次の政治」を読んで、これまでの政治と違う点を考えさせる。

「砂糖の国産化に取り組んでいる点は吉宗と同じ」「でも砂糖の国産化の仕事を武士ではなく、武蔵国大師河原村の名主にまかせている」「印旛沼の干拓は新田開発ということかな」「商工業者の組合に株仲間を作らせて営業税を納めさせた」「ロシアとの交易をやろうとした」「蝦夷地の大規模開拓をしようとした」など、殖産興業策に積極的に関係したことを読みとることができる。

これまで田沼意次の時代は、賄賂による腐敗政治の時代とされてきたが、近年再評価が行われている。吉宗の政治を一步踏み込んで推進するにあたり、多くの民間レベルの人々から情報を集め、実際に彼らに実行させたという政治手法が革新的だという。門閥出身ではない意次だからこそできたのではないかと評する人もいる。

しかし、天明年間(1781~1789年)を通じて、凶作や米価高騰に起因する一揆・打ちこわしが頻発し、田沼意次の失脚を早める結果となった。特に天明2・3年の奥羽地方の大飢饉は、2年は冷夏、3年も浅間山が大噴火して大降灰となり、甲信越から奥羽にまで冷夏となって凶作や米価の高騰を招いた。凶版⁶は、『凶荒凶録』収録の天明の飢饉で食料を求めてさまよう庶民の凶である。飢饉のひどい村々では食べてゆくすべがなく、穀物があると聞いた土地を目指して親子夫婦がちりぢりになり、はるばると他国へ赴く。路傍に死ぬ者もおびただしく、前代未聞のことだったと記されている。

1786年、田沼意次は失脚し、政治は松平定信へと引き継がれていった。

<参考文献>

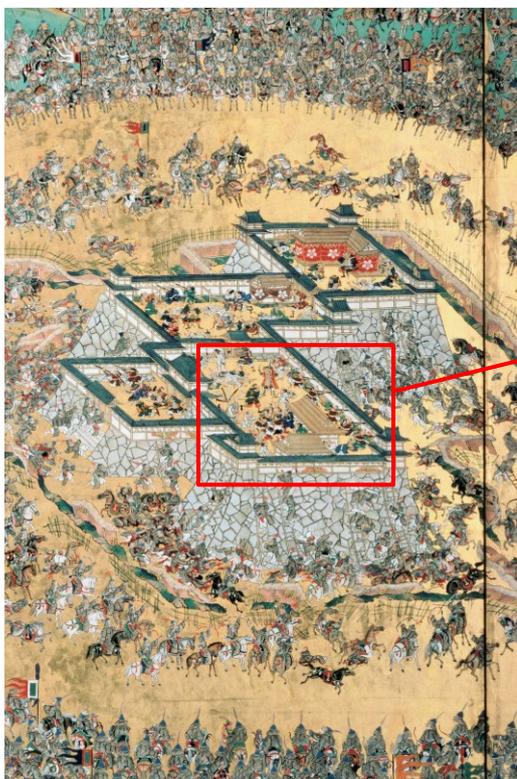
藤田覚『近世の三大改革』山川出版社 2002年

藤田覚『田沼意次』ミネルヴァ書房 2007年

落合功『大江戸マルチ人物伝池上太郎左衛門幸豊』

川崎市市民ミュージアム 2000年

倉地克直『全集 日本の歴史 第11巻 徳川社会のゆらぎ』小学館 2008年



本丸のようす

- ・浅野幸長あさのゆきながと思われる赤い陣羽織の武将
- ・殺された馬に群がって貪り食う兵たち
- ・城壁の狭間から敵兵を狙う鉄砲隊

『朝鮮軍陣図屏風』なべしまなおしげ(鍋島報効会蔵)は、佐賀藩の藩租・鍋島直茂が従軍した絵師に描かせた。この戦争で、鍋島家は大名としての地位を獲得した。自家の起源を語る重要な戦争として、屏風を江戸藩邸や国元で機会あるごとに家臣たちに公開したという。原本は焼失したが、他家に伝わる写本から復元された。(高橋修「合戦図を読む」『週刊・絵で知る日本史 24』集英社)

蔚山城に立てこもる日本軍 (教科書 p99)

3 蔚山城ウルサンじょう—築城の地獄と籠城の地獄

教科書には「蔚山城に立てこもる日本軍」(『朝鮮軍陣図屏風』)の図版を載せています。この蔚山城の工事のようすを従軍僧・慶念けいねんが書き記しています。

「工事は昼夜問わず進められ、大工が扱う金槌や手斧の音がすさまじく寝ることもできなかつた。兵卒や船の漕ぎ手や人足百姓らが、朝早くから夜遅くまで築城の用材を採りに山に駆り立てられる。作業は朝鮮側の伏兵と遭遇すれば首を切られる危険と隣り合わせであった。この襲撃を恐れて作業を怠れば、監督する奉行が、首を切って辻に立てて見せしめとした。作業に過ちのあったものは牢屋に入れられたり、首に鉄製の輪をはめられたり、焼き金を体に当てられたりした」

建設工事に駆り立てられたのは、日本人だけではありません。現地の人たちが徴用されて酷使されました。

慶念は「三悪さんあく(地獄)は目の前にある」と書いています。こうした中、逃亡する者が激増しました。

40 日間の突貫工事で完成間近になった蔚山城に、1597 年 12 月末、明・朝鮮軍が総攻撃をかけます。このとき、明・朝鮮側に立って働いた降倭がいました。その一人、呂余文という降倭は密偵となり、日本の兵に変装して城に入りました。呂余文は城のようすを探り、日本軍の配置と兵力数を書いたメモを明・朝鮮軍に差し出します。これにより、総攻撃が始まりました。

戦闘では、日本軍の火縄銃の攻撃で、明・朝鮮軍に

死傷者が続出しました。このため、明・朝鮮軍は城を囲い、水と食料が尽きるのを待つことにしました。城の中に井戸はなく、食料も尽きて、真冬の寒さと飢えにより、籠城する三千人に死亡するものが続出しました。

明・朝鮮の兵も氷雨と寒風の中で凍傷に罹り、戦闘心を失い始めていました。そこで、明・朝鮮側はかつて加藤清正かとうきよまさの家臣であった降倭・岡本越前守おかもとえぜんのかみ(沙也可)らを城に入らせ、城を明け渡せば兵の命は助けると、清正に勧告させます。そうしているうちに、日本側に援軍が来て、再び激戦となりました。多大な犠牲を出しながら、明・朝鮮軍は撤退しました。

清正ら倭城を築いた大名たちは、蔚山城の戦いから戦争の困難さを悟り、倭城を統合して戦線を縮小することを進言しようとはしますが、秀吉はこれを怒りました。

4 降倭たちの行方

蔚山城の戦いで明・朝鮮側の働きをした沙也可について、教科書 p99 に載せています。沙也可は配下の武士を率いて、集団で投降しました。武士の集団は即戦力になります。沙也可は戦功をあげて朝鮮の高い官職を得、子孫は繁栄しました。

一方、多くの降倭は個々に投降しました。朝鮮側は、個々の特技を調べて、それに応じた役割を与えました。鉄砲の製造や、砲術、火薬の製造などができるものは、これにあたらせ、特に特技がない降倭は、朝鮮水軍の

船漕ぎにされました。その一人、要汝文(ようえもん)が、1598年に投降したときの供述書が残っています。

「要汝文は、年齢 30 歳で、島津義弘の兵だった。弓矢と砲術の技術をいくらか心得ており、行軍の時は旗を立てて、先導にあっていた。

1592 年、朝鮮に従軍して釜山浦に駐屯し、3年後に帰国した。父母はすでに死去し、3 人の兄弟があるが、1 人は釜山に住み、2 人は島津の兵となっている。

1598 年、朝鮮再派兵により、再び釜山浦に来たが、ここで際限なき城の建設に動員された。そのような時、朝鮮側が降倭を優遇すると聞き、投降したのである」

要汝文(ようえもん)のような孤独な人が、降倭集団の最下層におかれまして。そして、彼らをまとめる立場の降倭・也汝文(やえもん)のもとに送られ、水軍の船の漕ぎ手として訓練を受けることになります。

5 朝鮮水軍・漕ぎ手の境遇

朝鮮水軍には、弓や大砲を扱う兵と、船の船頭・漕ぎ手がいました。海戦には大勢の漕ぎ手が必要とされ、1595 年には 1 万 3 千人を超えていました。漕ぎ手には奴婢が多く、厳しい朝鮮の身分制度のもとで、この人たちは賤視されていました。

戦闘になると、漕ぎ手に犠牲が多く出ました。砲撃を避けることもできず、陸に上陸したところをほとんどが切り殺されることもありまして。武器を持たない漕ぎ手にとって、戦場は恐怖でしかありませんでした。疫病や飢餓、寒さも兵士・漕ぎ手たちを苦しめました。



亀甲船 模型 〈国立晋州博物館〉

左右に 8 本ずつオールを備えている。ひとつのオールを 4 人(うち 2 人は交替要員)で担当し、亀甲船 1 隻に 64 人の漕ぎ手が配置された。

1593 年 8 月、李舜臣は報告書に書いています。「疫病が蔓延し、大半が感染し、死亡者が相次いだ。それだけではない。兵糧の蓄えが底をつき、飢餓に苦しんでいる。飢餓のため、ひとたび疫病に罹れば必ず死んでしまう」。李舜臣は兵糧の手配に腐心します。

1594 年 4 月には次のように書いています。「この年の正月から陣中に疫病が蔓延した。4 月までの死亡者は 1905 人、罹患者は 3759 人に達する」

飢餓と疫病のために死亡者が増えるなかで、食糧泥棒が頻発しました。李舜臣は、処刑をもってこれを取り締まりましたが、兵糧泥棒は後をたちませんでした。盗めば処刑されるが、食べなければ死んでしまう。追いつめられた状況下、命がけで逃亡するものが出ます。

要汝文(ようえもん)たち降倭は、このような状況の水軍に、漕ぎ手の補充として送られました。

6 戦乱に巻き込まれた人たちの声を聞く

朝鮮侵略戦争は膨大な死者を出しました。下の表は「参加国の兵力損失(1592 年～1598 年)」です。

	投入兵力(人)	損失兵力(人)	損失率(%)
朝鮮軍	97600	70000	72
日本軍	399100	116800	44
明 軍	191100	83700	35

(『向かいあう日本と韓国・朝鮮の歴史・前近代編下』p108 より)

この表には現れませんが、戦場となった朝鮮の民衆は逃れようもなく暴力にさらされました。慶念は 1597 年の日記に、河東に下船した日本兵が「人に劣らじ負けじと、物をとり、人を殺し、奪い合う」ようすを驚愕して書いています。軍勢は、放火・拘引・殺戮に及びました。「すべてを焼き、人を打ち斬り、くさり竹の筒で首をしぼり、親は子を嘆き、子は親をたずねるあわれなようすを見た」「親子の嘆きは地獄の鬼に攻められているようだ」

戦史は華々しく記録されても、民衆の苦しみは埋もれ、忘れ去られてしまいます。わずかに残る記録に耳を凝らせば、必死に生き延びようとした降倭たちの声、略奪・殺戮にさらされた民衆の叫び声が聞こえてきます。戦争の壮絶な暴力が見えてきます。

■参考文献

北島万次『秀吉の朝鮮侵略と民衆』岩波新書
李舜臣著・北島万次訳注『乱中日記』1～3、平凡社
中野仁『文禄・慶長の役』吉川弘文館

を奪っていく略奪行為が行われたことが明らかになっている。

導入は、この絵から疑問に思うことを自由にあげさせたい。子どもたちがイメージする鎌倉時代の頃の戦いは、馬に乗る、華麗で勇ましい武士の姿であろう。そのような認識でこの絵を見れば、常識が揺さぶられる。続いて子どもたちは「この人たちは武士ではなく、農民など一般の人たちではないか。なぜ、戦いに農民が加わっているのか」などの疑問を持つだろう。それを探る手がかりが、フォーカスに書かれている。ここから、「平氏に対して何がおこったのか」、「戦闘はどんな方法がとられていたか」、「農民はなぜ動員されたか」などを読み取らせたり、「出征した農民の家族はどうなったか」を想像させたい。

追いつちをかけるように 1181 年に養和の大飢饉がおこり、夏の干ばつと秋の台風で農作物が大打撃を受けたことを説明し、内乱に動員された民衆はどう思うか意見交換をさせたい。民衆の姿に共感しながら、興味を広げたいところである。

2 東国の武士はなぜ頼朝に従ったのか

源頼朝は、こうした民衆を巻き込む大規模な内乱をどのように収束し、鎌倉幕府を成立させたのだろうか。これまでの授業で多く行われてきたのは、源氏 VS 平氏という、いわゆる「源平合戦」であろう。平氏政権のおごりに不満をもつ武士が各地で反旗を翻し、その中から源氏の血筋を引く源頼朝が勢力を広げ、壇ノ浦の戦いで平氏を滅亡に追いやり、鎌倉幕府を創立するというストーリーである。

しかし、子どもたちは予定調和なこの筋書きに、次のような疑問を持つのではないか。挙兵してまもなく、平氏方の軍勢に大敗を喫して命からがら逃れてきた頼朝に、なんで東国の武士たちは従ったのだろうか、と。

この疑問は、鎌倉幕府の根幹である御家人制に通じるものだ。限られた授業展開のなかでは、「源平合戦」の名場面をたどるよりも、地方武士の視点から、彼らが頼朝に何を求めて従ったのかを考えさせてみてはどうだろうか。そのための教材として、§ 1 では下総国(千葉県)に開発された荘園である相馬御厨を取り上げている。相馬御厨についての概要を以下に示そう。

千葉氏と上総氏はともに荒れた地域を再開発し、上総・下総に強い勢力をつくりあげた武士団だった。12 世紀になると、千葉氏は本領である千葉荘のほか、相馬御厨とよぶ土地を伊勢神宮に寄進してその支配を任されていた。

ところが、千葉常重が年貢を納めていないことを理由に、この相馬御厨は国司に没収されてしまった。このときから、相馬御厨をめぐる争いが起きる。常重の子常胤は、京都から下向していた源義朝の家来になることでかろうじて領地を維持していたが、義朝が平治の乱で敗死すると、今度は平氏と結んだ常陸の佐竹氏に相馬御厨の支配権を奪い取られてしまった。下総国内の他の領地についても、平清盛と親戚関係にある国司の代官にうばわれそうになっていた。

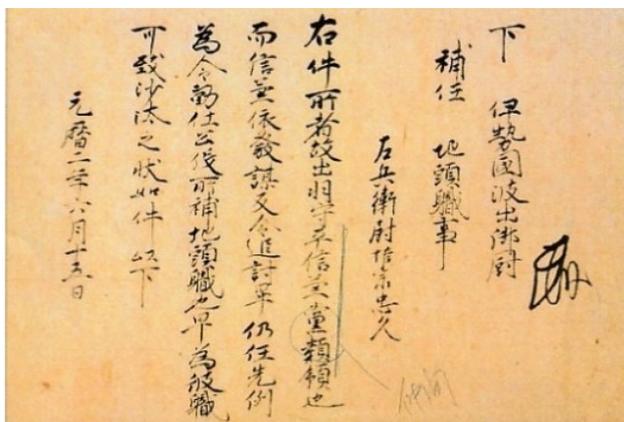
頼朝軍に参加するに先立って、千葉常胤が平氏方の代官を攻めたのはこのためであった。常胤にとっては、頼朝の挙兵は自分の領地をまもるための絶好の機会だったのである。その後、常胤は頼朝に協力してすべての戦争に従軍することで、房総にゆるぎない力を築いていった。いっぽう、房総最大の勢力を誇っていた上総広常は、頼朝が朝廷との政治折衝に乗り出すことに反対したことなどから、頼朝に殺された(2)。

上述のように、相馬御厨は千葉氏が開発し、伊勢神宮に寄進された荘園であるが、その後は現地の支配権をめぐる紛争が起こっていた。平氏政権の頃には佐竹氏に奪われており、千葉氏にとってはそれを取り返すことが切実な願いであり、その実現のために頼朝に従ったと考えられる(3)。この後、内乱の過程で頼朝による敵方所領の没収と、それを「地頭職」として頼朝から御家人へ給与する行為が次々に行われていく。このことは、1185 年 11 月の「文治勅許」による守護・地頭設置以前から、頼朝のもとですではじまっていた(次ページ 教科書図版4とキャプション)。

このように、相馬御厨は頼朝の軍事政権の根幹を捉える上で格好の教材である。ただし、登場人物が多く、権利の変遷も複雑なため、本文では極力簡略化している。まずは本文から登場人物の関係図をつくり、疑問や気づいたことを発表させたい。子どもたちは、「逃れてき

た頼朝に、大きな武士団の千葉氏や上総氏が味方をしたことや、「千葉氏は佐竹氏に自分たちが開発した土地を奪われたことに、恨みをもっていた。だから頼朝に味方したのかな」など、この紛争の経緯をつかんでいくことになる。続いて、千葉常胤が頼朝のもとにかけた時、どんなことを思っていたか考えさせたい。「後ろ盾は血筋が良い人がよい」「このままではご先祖さまに申しわけない」「打倒佐竹！土地を守るために頼朝を立てて戦うぞ！」など、地方武士の主体性が浮き出るのではないだろうか。

図版4とキャプション



4 地頭の任命文書

右下に源頼朝の花押(サイン)がある。謀反をおこした平信兼を討ち、その仲間の領地だった波出御厨(伊勢国)の地頭に、1185年6月15日、御家人の惟宗忠久を任命するとある。〈「島津家文書」東京大学史料編纂所蔵〉

3 鎌倉幕府はどのように支配を広げたか

それでは、鎌倉幕府はいつ成立したのか。また、何をもって鎌倉幕府の成立とみなすか。この問いは、研究史上でも長く議論されてきた。だが近年、鎌倉幕府は何か1つの出来事をもって成立したとするのではなく、段階的に成立したとみるのが妥当であるという考え方がとられるようになってきた。授業のまとめにおいても、そのことを意識した問いかけをしたい。鎌倉幕府の成立の理由について意見を述べ合う中で、それぞれの認識が深まるような発問の工夫が必要である。

まずは、「鎌倉幕府が支配を広げるきっかけとなった出来事を、本文から複数探してみよう」とし、あげさせていく。「1180年の頼朝の挙兵」「鎌倉に本拠をおいて東国を支配した」「平氏滅亡」「守護・地頭の設置」「奥州藤原氏の滅亡」「頼朝の征夷大將軍任命」「承久の乱」

などから、いくつか出てくるだろう。もし、余裕があれば、1183年(寿永二)10月に出された宣旨を紹介して、それまで反乱軍の立場に過ぎなかった頼朝軍が、朝廷から正当な地域権力として追認されたことを選択肢として示すと、なお深まりがでるだろう。

続いて、「これらのうち、最も重要なターニングポイントはどれか。その理由を発表しよう」と問い、考えさせたい。本文には守護・地頭の設置の記述のあとに、「こうして、強い軍事力を基盤にした鎌倉幕府がつくられました」と書かれているので、最も支持が集まるのは守護・地頭の設置だろう。だが、これまでの内容を学んだ子どもたちからは、すでに挙兵時から頼朝が自らの意思で所領を与えていた事実を重視する意見も出るかもしれない。それぞれを支持する理由を発表させて、意見交換をすれば、鎌倉幕府とは何かという事に対するそれぞれの認識が深まっていくのではないか(4)。

以上のように、鎌倉幕府成立について、民衆・地方武士・幕府の3つの角度から考えていく内容構成を意識した。この教科書を使って、内乱期に生きた人びとが何を願い、どんな社会を目指したのかを考えてもらいたい。

【注】

- (1) 川合康『源平合戦の虚像を剥ぐ』(講談社、2010年) pp. 106~113、要約
- (2) 千葉県歴史教育者協議会・編『おはなし千葉の歴史』 pp.23~25、要約。
- (3) 千葉氏など在地領主の動向に関しては、高橋修「武士団と領主支配」(『岩波講座日本歴史 第6巻 中世1』岩波書店、2013年)を参照されたい。さらに野口実『源氏と坂東武士』(吉川弘文館、2007年)は、千葉常胤が、平治の乱で配流された源義隆(義家の子)の遺児を育てたことや、近江国三井寺にいた子息の日胤を通じて、平氏政権の末期的状況を認識していた可能性などに言及している。乱後の不利な形勢のなかで、多方面に手を打っている様子がわかる。なお、高校日本史の実践であるが、相馬御厨の紛争を教材として行った授業に、拙稿「源義朝は侵略者か紛争調停者か—武士の成立と展開」(『新しい日本史の授業』山川出版社、2019年所収)がある。
- (4) 鎌倉幕府成立の意味を問いかけた高校日本史の授業に、若杉温「鎌倉幕府ができた意味を考えよう」(『新しい日本史の授業』所収)がある。